悪霊憑きの女ソロモニヤの物語
―翻訳と解説―

栗原成郎

我らがいと高き女君主, 至聖生神女にして永貞童女マリヤならびに
ウーステュグの奇蹟者, 聖人にして義人なるプロコーピイ及びイオアンの奇蹟
悪霊憑きの女ソロモニヤの物語

さて兄弟たちよ, 魂にとりてきわめて有益なる愛の物語を汝らが想起せんことを, 我は願う。そは, 我らの時代に実際にありしことなり。憐れみ深き主なる神は, 我らのあまたの罪業にもかかわらずその故をもって我ら人間を拒み給うことなく, かえって御慈しみをもって我らを顧み給い, 至聖生神女(しょうしんじょ)ならびに聖人にして義人たる神の僕(しもべ)プロコーピイ及びイオアン[1]を通じて力ある奇蹟をなし給えり。主は, 被造物たる人間を拒み給わず, それのみか, かえって一層憐れみ給いて見棄て給うことなく, また御自身の御手の業なるものを忘れ給うことなし。そは, キリスト教徒すべての庇護者たる我らの至聖生神女・永貞童女マリヤ及びウーステュグの町の守護聖人にして義人たるプロコーピイならびにイオアンによりて為されたる恐怖と戦慄に満ちたる, いと輝かしき奇蹟の出来事なり。その奇蹟物語を, 我,女子修道院の罪深き司祭イヤコフ[2]が, ソロモニヤの聴悔司祭たる至聖生神女・使徒聖堂の聖職司祭ニキータ[3]及び彼女の実父たる司祭ディミートリイの立ち合いのもとにソロモニヤ自身の口から聴き, 後世のキリスト教徒に記憶されんため, 記したるものなり。

1661年2月2日のこと。スホナ川上流域のウーステュグの町から40キロほど離れたところのイェゴロツカヤという村に至聖生神女聖堂がある。その教会にディミートリイと

[1] プロコーピイ及びイオアン　両者ともにウーステュグの司祭で東方正教会の「佯狂者」（ユローヂヴィ＝キリスト故の聖なる愚者）。プロコーピイ（命日― 旧暦7月8日）は西方ドイツ人居住地の富裕な商人であったが, 東方正教会の美しさに魅了され, 献身して佯狂者となる。教会の伝承によれば1303年に逝去。イオアン（命日―旧暦5月29日）はヴェリーキイ・ウーステュグ近郊の村の生まれ, プロコーピイの聖なる愚者の修行に倣って献身して司祭となった。1494年歿。この二人の聖者伝は16～17世紀に作成された。ヴェリーキイ・ウーステュグはヴォログダ県の小都市。
[2] イヤコフ　ヴェリーキイ・ウーステュグの救世主変容女子修道院の司祭。
[3] ニキータ　ニキータ・ティモフェーエフ・ポロゾフ, ヴェリーキイ・ウーステュグの救世主大聖堂の司祭。1663～1680年のウーステュグのさまざまな古文書において言及されている。

いう名の司祭がいて, 彼にはイウリータという名の妻がいた。この夫妻にソロモニヤという名の娘がいた。これから話すことは, その娘の身に起こった出来事である。

ソロモニヤが成長して年頃の娘になったとき, 両親は, 娘を正式に結婚させるため, 名をマトフェイという農夫に嫁がせよう, と思い立った。そして両親の思いは成就した。

婚礼のあとソロモニヤは花嫁の寝室に入った。そしてしばらくすると, 夫は便意をもよおして寝床から起き上がり, 家の外へ用足しに出ていった。そしてマトフェイが外へ出ていったあとの出来事。昔からキリスト教徒を憎悪してきた悪しき老悪魔サタンは, 宿敵人間との闘いを止めようとしなかった。それが悪魔自身の意志によるものか, それともどこかの邪悪で狡猾な人間の差し金によるものかは, 分からぬが, この女性を破滅させることを思いついた。

悪魔はソロモニヤの家へやって来て, いきなりドアをノックして人間の声で言った。「ソロモニヤ, 開けてくれ！」ソロモニヤは寝床から起き上がり, 夫が戻ってきたのだと思って, ドアを開けた。すると, ソロモニヤの顔, 両目, 両耳に何か大きなつむじ風のようなものが吹きかかり, 何か青く燃え上がる炎のようなものが現われた。ソロモニヤは自分が夢を見たのかと疑い, 戸惑っていた。すると間もなく夫が家へ戻ってきたので, ソロモニヤはいっそう恐ろしくなり, その夜は一晩中まんじりともしなかった。激しい悪寒に襲われて体の震えが止まらなかった。

三日目にソロモニヤは自分の胎内に胎を引っ掻く狂暴な悪霊がいるのを感じた。そしてその時, 自分の中に住みついた悪霊のために知力が鈍った。

結婚後九日目のこと, 日没後ソロモニヤは夫と一緒に部屋の中にいて, 夫婦は寝床に入って眠りに就こうとしていた。すると突然, ソロモニヤは悪霊を見た。それは, 毛むくじゃらで, 鋭い鉤爪を持った獣(けだもの)の姿で彼女のもとへやって来て, 寝床の上で彼女に寄り添って横になった。ソロモニヤは獣に怖気をふるい, 恐ろしさのあまり気を失った。獣は猥らな振る舞いで彼女を穢した。ソロモニヤは翌日, 昼の三時に我に返ったが, 昨夜の悪魔の悪事を誰にも告白できなかった。

その日以来, 呪わしい悪霊たちが, 大祭の日を除いて毎日のように人間の姿をとって, ときには美しい青年の姿で五人ずつ, 六人ずつ組をなしてソロモニヤのもとに通ってくるようになり, 襲いかかって彼女を穢した。人間の目にはこのことはまったく見えなかった。それで, ソロモニヤは, 自分のところへやって来る呪わしい悪霊たちによって自分の身に起こったことを夫に告白した。それに対して夫は何も答えなかった。ソロモニヤが夫と一緒に一つ屋根の下に暮らしてしばらくの時が経った。夫は妻の破滅の様子を見て, 妻を

実家の父ディミートリイ司祭のもとへ連れていった。ソロモニヤは父親のもとで暮らしはじめた。

呪わしい悪霊たちは父の家にいるソロモニヤのところにもやって来るようになった。ソロモニヤが家の玄関先に出ると，あの呪わしい悪霊たちは人間の目には見えない形で彼女を攫(さら)い，水の中へ連れ去った。ソロモニヤは大声をあげて泣き叫んだ。家の者たちは外へ出てみたが，ソロモニヤの姿を見ることができず，ただ彼女の泣き叫ぶ声が聞こえるだけだった。ソロモニヤは，悪霊たちのもとに置かれて水の中で，ときには二日，ときには三日暮らした。呪わしい悪霊たちは彼女を穢した。そしてさらに悪霊たちは，ソロモニヤを連れ去っては，ときには森の中に棄て，時にはどこかの野原に裸のままで置き去りにした。そしてどこかのキリストを愛する人に助けられて，ようやく家へ帰るのができるのだった。ソロモニヤの父と母は，自分たちの娘のそのような破滅状態を目にして，心を痛めて泣き，どうすれば良いのか分からずに，途方に暮れていた。

その後しばらくするとまたもや，呪わしい悪霊たちは，父の家の中にたった一人でいる時のソロモニヤのところへ来た。そして呪わしいものどもはソロモニヤを苦しめ，彼女を放り投げはじめた。あるものは彼女を家の一方の隅へ，あるものは別の隅へ，あるものは暖炉の上へ投げるなどして，長時間にわたって苦しめた。それから何かの綱を手に取ってソロモニヤの首に巻き付け，さらに綱で結んだ石臼を持ち上げて彼女の顔の上と胸の上に載せた。そしてベンチに結びつけて全体を高く引き上げて天井の梁に宙吊りにした。隣家の人がこの悪霊に取り憑かれた女の身に起こっているただならぬ物音を耳にして，ソロモニヤの父親に通報した。父親が駆けつけてきたが，家の中には誰の姿も見えず，ただぐったりとしている娘と娘の首に結び付けられている綱と石臼とベンチが目に入った。ソロモニヤは家の天井からどうやって身を解き離したらよいか分からなかった。それに長時間死んだようになっており，そのような苦しみのためにほとんど意識がなかった。駆けつけてきた父親がやっと娘を解き離した。同じく駆けつけてきた隣人たちは，ソロモニヤが全身打ち傷だらけで青黒くなっているのを見た。しかしソロモニヤは，身体上は何の病気も感じていなかった。

父と母は，ソロモニヤを夜になる前にひとり家の中に閉じ込めた。娘のことが怖くなったからである。あの呪わしい悪霊たちが来ると，ソロモニヤは気が狂ったようになった。悪霊たちはソロモニヤに鉄製の槍を持たせた。その槍で自分の父親を突き殺させるためである。翌朝起きると，ソロモニヤは父親にその槍を見せた。それは本物の槍で，幻想ではなかった。そのような苦しみは絶えることがなかった。悪霊たちのせいでソロモニヤは心の安らぎをもつことがまったくなかった。これら悪霊たちの仕掛けた罠ほど悪辣な

ものは他に例を見ない。それを書き記すことは不可能である。この地方にはこの悪魔の奸計を証言できる人は多くいるけれども。

その後しばらくして, また呪わしい悪霊たちが来た。彼らはおびただしい数の水のデーモンたちで, ソロモニヤが彼らのもとに住み, 彼らと同じように彼らの父なるサタンを信じるように, また彼らと一緒に飲み食いし, 彼らに従うように強制した。とりあえず彼らは, 媚びへつらいとおだてによってソロモニヤにキリスト教信仰を棄てさせようと誘惑して言った。「どうだね, ソロモニヤ, ここでのおれたち暮らしは一から十まで素晴らしいだろう。おまえは, おれたちと一緒に暮らせば, 大いなる尊敬を受け, 退屈することは絶対にない」しかしソロモニヤはなにも答えなかった。呪わしい悪霊たちは, 愛想とおべっかによって誘惑してもソロモニヤに真のキリスト教信仰を棄てさせることは不可能と見て取って, 彼女を責(せ)め苛(さいな)みはじめた。—ソロモニヤの体を引き伸ばして壁にはりつけにし, 両方の手と脚とを結び合わせて打ち付け, 槍で刺し, 角(つの)で突き, 体じゅうを鉤爪で引き裂きはじめた。悪霊たちは, さらに尋ねた。「おまえは, おれたちを信じるか, おれたちの父なるサタンを信じるか？」ソロモニヤはなにも答えなかった。そこで悪霊たちは, ソロモニヤの縄目を解いて, ある高い崖へ連れて行き, 彼女の手足をつかんで下へ投げ落とした。ソロモニヤは死人のように横たわった。

それから彼ら, 黒い姿かたちの悪霊たちは, 再びソロモニヤを自分たちの住処へ連れていった。そして一人の娘にソロモニヤの身を預けた。悪霊たちは, その娘をヤロスラフカと呼んでいた。そこで娘はソロモニヤに質問をしはじめた。「あなたは, どうやってここへ来たの？ どの町, どの村の人なの？ お父さん, お母さんは？」ソロモニヤは, 自分の身に起こったことをすべて話した。すると娘はソロモニヤに言った。「ソロモニヤ, もしあなたがここに住むことを望まないのならば, 彼らと一緒に食事をしてはいけません, 飲んでもいけません。そして彼らになにも答えてはいけません。そうすれば, 彼らはあなたを苦しめるでしょうが, そのあと解放するでしょう」そしてしばらくすると, 彼ら呪わしいものたちが来て言った。「おまえは, おれたちを信じるかね？」ソロモニヤはそれに対してなにも答えなかった。すると, 彼ら黒い姿かたちの邪悪な霊たちは, ソロモニヤをさんざん苦しめたあとで, 半死半生のソロモニヤを森へ運んで, そこに棄て去った。ソロモニヤは, 苦労に苦労を重ねてやっとのことで家へたどり着いた。

ソロモニヤは父の家に六日いた。するとまたもや, 彼ら呪わしい黒い姿かたちのものたちがやって来て, 人の目に見えない形でソロモニヤを捕えて自分たちのもとへ連れ去った。ソロモニヤは, 彼らのもとに二日二夜いて, 彼らとの関係により妊娠し, 一年半, 胎内に子

どもを宿していた。出産の時が来たとき，ソロモニヤは父の家に帰された。そして，出産する旨を告げて，父親をはじめ家の者全員に家の外へ退出してもらった。黒い姿かたちの悪霊たちが家人を殺すといけないと思ったからである。

出産が始まると，一人の女がソロモニヤのもとへ黒い姿かたちの悪霊たちから遣わされてやって来て，産婦の世話をしはじめた。ソロモニヤは，六つの悪霊を産んだ。子どもは青黒い姿かたちをしていた。ソロモニヤの世話をした女は，子どもらを取り上げると，家を出て子どもらを橋の下へ連れ去った。

父親は家人と共に家の中に戻って，食事をはじめた。すると，彼ら黒い姿かたちの悪霊の子たちが橋の下から上がってきて，石を投げたり，土塊（つちくれ）をぶつけたりしはじめた。父親，母親，家に住む者たちはみな，そのような悪魔の乱暴狼藉と自分たちの娘ソロモニヤの破滅の姿を目の当たりに見て，家の外へ逃げ出した。家にはソロモニヤがひとり残った。

ところで黒い姿かたちの女は，血の入った容器を携えてソロモニヤのもとへ戻ってきて，ソロモニヤに飲むように命じた。しかしソロモニヤはそれを飲むことができずにいた。すると，黒い姿かたちの女は言った。「あんたがこの血を飲まないのならば，あんたは自分の父親を殺しなさい」ソロモニヤは言った。「もう少しわたしに時間をください，そうすればわたしは父を殺します」ソロモニヤがそう答えたのは，自分が産んだ黒い姿かたちの悪霊の赤ん坊たちが，まるで凶暴な蛇のように乳首を吸うので，その苦しみに耐えることができなかったからである。

家の者たちはみな，悪霊たちの投石を恐れて三日三晩家の中を見なかった。四日目にやっと家の中に入ったが，家の中には誰の姿も見えなかった。黒い姿かたちの悪霊たちは，またもやソロモニヤを連れ去って，彼女を穢した。彼らの悪魔的な狼藉によってソロモニヤは妊娠して父の家で二つの悪霊を産んだ。そしてまた人の目に見えない形で悪霊たちは，ソロモニヤのもとから子どもを連れ去った。また別の時に，ソロモニヤは黒い姿かたちの悪霊を一つ産み，さらに二つの黒い姿かたちの悪霊を産んだ。出産する時，ソロモニヤはパンを少しも食べなかったが，人の目に見えない形で黒い悪霊たちが鳥の血と草と草の根を持ってきて —それで産婦を養った。

それからほどなくして，かの呪わしいものたちは，人の目に見えない形でソロモニヤを捕えて自分たちの住処である水の中へ連れ去った。ソロモニヤは三日三晩悪霊たちのもとにいた。父親と母親は，娘の命はもうないものと絶望して慟哭した。かの呪わしいものたちは，ソロモニヤを自分たちの住処へ連れ帰って，自分たちに子どもが生まれたことを慶び祝って，お祭り騒ぎをはじめた。彼らは，子どもらをソロモニヤの前へ連れていって，

子どもらに尋ねた。「おまえらにとってこの女は何か？」子どもらは「おれたちの母ちゃんだ」と答えた。そのあと呪わしい悪霊たちは, それぞれの座に就いて互いに大手柄を褒め合い, 尊敬し合い, 飲み食いをはじめて, ソロモニヤにも自分たちと一緒に飲み食いするように強(し)いたが, 彼女は応じようとはしなかった。呪わしいものたちは, ソロモニヤを痛い目にあわせるぞ, と言って脅しはじめた。ソロモニヤは, いやいやながら彼らの言うことを聞いた。彼らは, ソロモニヤに柄杓(ひしゃく)を渡して葡萄酒をなみなみと注ぎはじめ, 黒い姿かたちのものたち全員にその柄杓を持っていって酒を勧め, 全員の名前を呼ぶように命じた。ソロモニヤは彼ら全員に, 最初のものから最後のものまで, 酒を与えた。彼らの数はあまりにも多かった。彼らは互いに言い合った。「おれたちは, あの女をあらゆる手を使って苦しめてやったなぁ。—ぶちのめしたり, ナイフで切ったり, 槍で刺したり, 爪で体じゅうを引っ掻いたりしたもんだ。あれは, 女に自分の信仰を棄てさせ, おれたちを信じさせ, おれたちと一緒に住まわせるための手段だった。ところが, あの女を改宗させることがどうしてもできなかったなぁ」そこで彼らは言った。「かくなるうえは大釜に湯を煮えたぎらせて, そこにあの女を投げ込もう。そうすれば, きっとおれたちに服従するだろう」そして悪霊たちの悪い相談は忘れ去られることはなかった。

悪霊たちは, ソロモニヤを再び娘ヤロスラフカに託した。ソロモニヤは, 彼らから聞いたことをすべてヤロスラフカに話した。その娘ヤロスラフカはソロモニヤに言った。「ソロモニヤ, もしお望みならば, あなたがお父さん, お母さんのところへ別れを告げに行ってくることができるように, わたしが彼らに頼んであげましょうか？」そしてその娘ヤロスラフカは, 悪霊たち一つずつの名前を覚えるように教えはじめた。娘は, 悪霊たちの名前を十ずつ挙げて教えた。ソロモニヤは, 彼らの名前を全部覚えた。それからヤロスラフカは言った。「ソロモニヤ, あなたがお父さんのところへお別れを言いに行くことを許してもらえたならば, 今わたしが教えた彼らの名前をお父さんに書きとめるように言いなさい。そしてお父さんに, 血を流していない生贄動物を主なる神にささげる聖堂の至聖所において彼らの名を挙げて呪うように, 命じるのですよ。そうすれば, 呪いを受けたものたちは, あなたを連れ去ることも, あなたに近づくこともできなくなります」そしてその娘ヤロスラフカは, 黒い姿かたちの悪霊たちの所へ行き, 申し立てた。「ソロモニヤを父親のところへ別れを言いに行かせてください。ソロモニヤは, 父親に別れを告げさえすれば, ここへ来てずっと住むことになるでしょう」

悪霊たちは, ヤロスラフカの言うことを聞いて, ソロモニヤを父親のもとへ行かせることにしたが, その途中, とある沼のほとりに連れ出した。おびただしい数の呪わしい悪霊たちがそこにいた。そして彼らは, ソロモニヤを沼の中に沈めはじめた。ちょうどその時,

稲妻が走り, 恐ろしい雷鳴がとどろき, 地が揺れ動き, 天を覆う黒雲が湧き起こった。そして呪わしいものたちに電光が襲いかかって雷が落ちはじめ, 彼らを打ち殺しはじめた。その数はおびただしかった。沼と湖は彼らの死体で満たされ, まるでタールで覆ったようになった。ソロモニヤは彼らから逃げ出して, とある洞窟に身を隠した。しかし生き残った呪わしい悪霊たちがそこでもソロモニヤを見つけ出して, 言語を絶する残虐行為で再び彼女を苦しめはじめた。その時, 再びすさまじい嵐と落雷と稲光が起こった。呪わしい悪霊たちは, ようやくソロモニヤから離れた。ソロモニヤは彼らのもとから逃げて, 悲嘆に打ちひしがれて家にたどり着いた。

父親と母親は, 娘を見て欣喜雀躍した。両親は, 黒い姿かたちの悪霊たちの水の中の住処から帰ってくるわが娘を見ることは永久にないと思っていたからである。ソロモニヤは, 悪霊たちによって自分の身に起こったすべての事, ヤロスラフカという娘が悪霊たちの名前を教えてくれて, 血を流していない生贄を主なる神にささげる聖堂の至聖所において悪霊たちを, それぞれの名を挙げて呪詛するように父親に命じるよう話した事の次第をすべて父親に語りはじめた。父親, 母親はじめ, 親戚縁者はみな, 悪霊たちのせいでソロモニヤの身に降りかかった凄惨をきわめた災難の話を聞いて嘆き悲しみ, 涙をとどめることができなかった。そのあと, 父親は, ソロモニヤに教えてもらった悪霊たちの名を書き留めた。ニキータ司祭は, 聖堂の至聖所において彼ら呪うべきものたちの名を挙げて呪詛した。[4] ソロモニヤは, それら悪霊たちから受けた苦しみのために身体上の病気になった。

その病気の日々のある日, ソロモニヤはほとんど眠れずにいた。浅い夢の中である優美な女性を見た。その人は近づいてきて言った。「ソロモニヤ, ウーステュグの町へ行きなさい。ここに住んでいてはいけません。呪術師たちに治療を頼んではいけません。彼らは, あなたの助けにはなりません」ソロモニヤは, その女性に名前を尋ねた。その女性は言った。「わたしは聖フェオドーラ[5] です」そして, あっという間にその姿は見えなくなった。ソロモニヤは, 夢から覚めると, 夢で見たことを父親に話した。父親は, 娘にウーステュグの町へ行くように命じた。ところが, ソロモニヤは言った。「そのお言葉に従うことはできません」—悪霊たちが彼女の中に戻ったのである。父親は, やっとの思いでソロモニヤをウーステュグの町へ行くように説得して, 娘をそこへ連れていった。

---

[4] 悪霊を調伏するには, 呪詛者は, 悪霊たちを自分の支配下に置くためにそのものたちの名を知らなければならなかった。悪霊たちは自分の本名を知られると滅びる。

[5] 10 世紀のビザンツの聖者伝に記されているコンスタンティノープルの聖テオドーラ, あるいはアレクサンドリアの聖テオドーラを念頭に置いているらしい。

ウーステュグに着くと，ソロモニヤは至聖生神女大聖堂の近くの広場に住む同じソロモニヤという名の寡婦（やもめ）の家に住むように命じられた。ソロモニヤは，至聖生神女大聖堂に案内され，さらにウーステュグの奇蹟者，聖人にして義人のプロコーピイとイオアンの墓へ連れていかれた。するとソロモニヤの体の中に巣くっている悪霊たちが彼女の胎を引き破りはじめた。ソロモニヤは，身体上の病気になって倒れた。彼女の両親は，大聖堂の司祭ニキータを呼んだ。ニキータ司祭がやって来て，ソロモニヤの痛解［懺悔］を聴き，彼女にキリストの聖なる機密である聖体を拝領させた。しばらくすると，ソロモニヤは健康を取り戻した。ソロモニヤが正常な精神状態になって父親のもとへ帰ることを強く望んだので，彼女は実家へ連れ戻された。

ソロモニヤは，しばらくのあいだ父親の家に滞在していた。その間のある日のこと，太陽が西に沈むと，すぐに黒い姿かたちの森の悪霊たちがやって来て，大声でソロモニヤに呼びかけた。「囚われびとよ，おれたちのところへ来い，ここに住んでいてはならぬ」その声を父親のディミートリイ司祭，母親，家人の全員，村の住民たちが聞いた。ソロモニヤが父の家にいたのは八週間であった。彼ら，呪わしいものたちは，長時間にわたって何度もやって来てはソロモニヤに呼びかけ，父親にも話しかけたので，その声はすべての人々の耳に届いた。「坊さんよ，おれたちの囚人をよこせ，そうすれば，おまえにたくさんの金，銀，財宝を与えよう。おれたちの兄弟の水の霊たちが，おれたちにおまえの娘を譲ってくれたのだ。おまえの娘はおれたちの仲間を欺き，迷わせたのだ。水の兄弟たちはこう言ったぞ。『これからのちは，もう女を自分たちのところへ連れ戻すことは，おれたちにはできない。おまえたちが女を森の中へ連れて行ってくれないか』とね」こうして彼らは夜どおしやって来ては，ソロモニヤのいる家を壊さんばりの大声を張り上げて叫び，獰猛な野獣のように吼えた。

ちょうどその時，この村にある至聖生神女就寝聖堂の成聖式［聖別献堂式］が執り行われていた。この聖堂成聖式のためにウーステュグの至聖生神女大聖堂からソロモニヤの聴悔司祭のニキータ神父，長輔祭ディミートリイ，その他大勢のウーステュグの人々が来ていた。それですべての人が，悪霊たちがソロモニヤを自分たちのところへ呼び出し，父親に娘を渡すように要求する悪魔の奸計を聞いた。そしてある人は悪霊たちに対して反発して言い返したり，叱り付けたりしはじめたが，いっぽう彼ら呪わしい悪霊たちは，どの人間がどんな罪を犯したか，あらゆる人の心の内を暴き出して，それらの人々のありとあらゆる罪証をあげて罵った。それからほどなく呪わしい悪霊たちはソロモニヤを離れた。

父親は, ソロモニヤを神の教会に, すなわち至聖生神女聖堂と聖なる義人プロコーピイならびにイオアンの墓のもとに, 通わせるためにウーステュグへ連れていった。

ある日のこと, ソロモニヤは奉神礼の福音経が朗読されるあいだ, 至聖所正面の身廊に立っていた。ソロモニヤの胎内にいる呪わしい悪霊たちが彼女を聖堂の床に投げつけた。居合わせた人たちは, ソロモニヤが激しい勢いで倒れたので, 彼女が死んだのだと思った。呪わしい悪霊たちは, 子豚のようにたくさんの声でキュウキュウ呻きはじめた。その時ソロモニヤの腹は以上に膨れあがり, 彼女は意識がなかなか戻らなかった。しかしソロモニヤは神の教会から絶対に離れなかった。

ある時, ソロモニヤが浅い眠りに落ちると, 夢の中に聖フェオドーラが現われて言った。「ソロモニヤよ, あなたはウーステュグの町と至聖生神女聖堂と聖義人プロコーピイならびにイオアンの墓から離れずにここに暮らしなさい。そして決して外出してはなりません。イェルガ川流域のお父さんの家へ行ってはいけません。さもないと, 今にまた黒い姿かたちの悪霊があなたを攫(さら)うでしょう。そうなると, あなたの後(あと)の状態は前よりも悪くなるでしょう。あなたが悪霊たちのためにさんざん苦しんだのは, あなたに洗礼をほどこしたのが酔っぱらった司祭で, しかも聖なる洗礼の儀式の半分しか遂行しなかったのが理由です。そのことを知りなさい。ソロモニヤよ, あなたは, 従来通りの方式により正式に洗礼を受けなさい。そして三人の霊的神父をもつべきです。聖堂には聖歌が歌われるたびごとに必ず行きなさい。もし行くことができなければ, 誰かに連れていってもらうように, 頼みなさい」そのあと聖フェオドーラの姿は見えなくなった。

1671 年の大斎期にソロモニヤの父親と親族の者たちは, 苦心惨憺の末ソロモニヤを痛解［告解］させた。ソロモニヤは非常に緊張して聴悔司祭ニキータのもとで罪を懺悔して聖体を拝領した。しかし陽が沈むと, ソロモニヤの体内にいる呪わしい悪霊が再び騒ぎ出し, 彼女の胎を引き裂きはじめた。ソロモニヤは大声でわめいた。悪霊は彼女の左脇腹を噛み破った。ソロモニヤは激痛を感じて我に返った。そして自分のシャツが血に染まっているのを見て, 悪霊がその夜, 自分に対して行なった悪事の証拠を家の者たちに示した。家の者たちは, ソロモニヤの破滅状態を見て泣き崩れた。

翌朝, 早課の開始を知らせる鐘の音がひびくと, ソロモニヤは早朝の祈禱に出かけた。輔祭が「聖なる御母, 生神女に讃美の歌をささげん」と唱えると, 悪霊がまたもや騒ぎ出してソロモニヤの胎を引き裂きはじめた。早課の歌が終わるとソロモニヤは自分の住まいへ帰った。

昼の聖体礼儀の開始を告げる鐘の音が鳴ると，ソロモニヤは聖堂へ入ってイコンに接吻をはじめた。するとその時，ソロモニヤの胎に巣くっている悪霊たちが騒ぎ出し，彼女の胎を引き裂きはじめた。「聖使徒経」の朗誦が始まると，ソロモニヤは嘔吐しはじめて意識朦朧となった。聖体拝領の時が来ると，ソロモニヤの中に住む悪魔の軍勢が彼女を打ちはじめ，聖堂の床に投げ倒した。聖体機密を執り行なっていた司祭は，恐怖におののきながらも人々の手に支えられているソロモニヤにかろうじて聖体を受けさせた。悪霊はソロモニヤの口を借りて大声で叫びだした。「おお，よくもわたしを焼いたな！よくもわたしを焼いたな！」聖体礼儀が終わると，ソロモニヤは正気に返り，自分の住まいに帰った。その日からしばらくのあいだ，ソロモニヤの中に住む悪魔の軍勢はおとなしくしていたが，間もなく前よりもいっそう残酷に彼女の胎を引き裂き，彼女を苦しめた。呪わしい悪霊は自分の滅亡を知ったからである。

5 月 27 日のこと，悪霊とその残酷な加虐行為にさんざん苦しめられたソロモニヤは，疲れ果てて眠りに落ちた。そしてその夢の中で聖なる義人プロコーピイとイオアンが自分のもとへやって来るのを見た。二人の聖人は彼女に言った。「ソロモニヤよ，プロコーピイとイオアンに祈れ，彼らは当分のあいだおまえをそのような苦しみから救い出すであろう。天主経［主の祈り］を絶えず祈れ。そして従来どおりの方式により正式に十字のしるしをもって洗礼を受けよ」聖人たちは天主経を祈るようにソロモニヤに命令した。しかし彼女の中に住む悪霊が彼女に祈りをさせようとしなかった。ソロモニヤは非常に苦労した末，やっと祈りの言葉を唱えた。聖人たちは，ソロモニヤを祝福して言った。「ソロモニヤよ，汝に親族は居(お)るか？もし居るならば，彼らに毎日「聖詠経」を誦読するように命じよ」聖人たちはさらにつづけて言った。「ソロモニヤよ，汝はキリストを信じるや？」ソロモニヤは黙っていた。そこで聖人たちはまた言った。「ソロモニヤよ，汝はキリストを信じるや？」ソロモニヤは答えた。「わたしはキリストを信じます」聖人たちはさらに言った。「まことに汝は信じるや？」ソロモニヤは言った。「まことにわたくしはキリストを信じます」そこで聖人たちは言った。「主よ，神のキリストよ，ソロモニヤが汝(みまし)の僕(しもべ)であることをなおも望み給う，人間を愛し給うお方よ，汝(みまし)に栄光あれ」そしてすぐに聖人たちの姿は見えなくなった。そこでソロモニヤは夢から覚めたが，夢の中で見た幻を自分が完全に癒される時まで誰にも話さなかった。

1671 年 7 月 8 日ウーステュグの奇蹟者，聖なる義人プロコーピイの命日記念祭の日，奉神礼のあとソロモニヤは至聖生神女就寝大聖堂に入って，ヴェリーキイ・ウーステュグの大天使修道院の掌院アルセーニイ，至聖生神女就寝大聖堂の長司祭ウラジーミルならびに全会衆の前で自分自身について，我らの至聖生神女およびウーステュグの奇蹟者，聖なる

義人プロコーピイとイオアンの祈りによって自分がどのようにして完治を受けたかを告白した。

去る 1661 年, わたくしの罪の故に, 昔から人間の善を憎悪する老悪魔と彼の配下の悪霊の軍勢がわたくしの中に住みつき, わたくしを十一年と五か月の長きにわたって支配しました。その歳月, わたくしは, わたくしに加えられた言語を絶するありとあらゆる苦しみに難儀いたしました。罪びとであるわたくしは, 真(まこと)の光も, 陽の光も見ることはありませんでした。わたくしにとって昼はまるで夜のようでした。そしてわたくしは神の教会に縛られた囚われびとのように通い, ときには聖堂の中に立ち, ときには玄関部に立ちました。しかし聖詠の声も誦経の声も耳に入りませんでした。最初の日に悪魔の青い炎に触れた時の悪魔の恐るべき妄想のためにわたくしの眼は曇り, 耳は聾となっていました。その日以来, 奉神礼の聖歌の時にも私の耳にはいってきたのは, 大きな騒音だけでした。

7 月 8 日の前夜, 聖義人プロコーピイの命日に義人・奇蹟者プロコーピイの栄光ある奇蹟を聴くために聖堂へ行って徹夜禱に出席したいという望みがわたしに湧きました。それ以前にわたくしはそのような望みをいだいたことはありませんでした。そして聖堂まで来て, 聖堂の外の北門のそばに立ちました。その時, 聖堂の中では聖プロコーピイの聖者伝が朗読されていました。わたくしはそこに一時間ほど立っておりましたが, わたくしの兄がわたくしを聖堂の中へ入らせようとしていました。わたくしは, 自分の兄が怖かったり, 居合わせた人々を前にしてわが身を恥じるところがあったりで, なかなか足が動かず, 苦心惨憺の末やっと聖堂の中へ入ることができました。―わたくしの中にいる悪魔の軍勢が聖堂の中に入ることをさせなかったのです。

兄は, 会衆が大勢集まっていたので, わたくしを左側の聖歌隊席に座るように命じました。わたくしは兄に言いました。「わたくしを朗読者のそばへ連れていってください。ここでは聖プロコーピイの奇蹟の話が聞こえませんから」兄はわたくしの手を取って朗読者の近くに立たせました。わたくしはそこに黙って立っておりましたが, 突然見たのです。聖プロコーピイの柩が揺れ動いたのです。わたくしの中に住んでいる悪魔の軍勢が騒ぎ出し, 胎内の悪魔が赤ん坊のように泣きはじめました。居合わせた人々は, 恐るべき悪魔の悪事を聞くことになりました。

わたくしは聖堂の中に立っていることができず逃げ出し, 玄関口の奇蹟者聖コスマと聖ダミアン[6]の祭壇まで来ました。そこでわたくしは気が遠くなり, 兄と他の誰かに支えら

[6] 聖コスマと聖ダミアン　聖クジマ Кузьма, 聖デミヤン Демьян とも呼ばれる。3 世紀後半～4 世紀前半の小アジア出身の兄弟。医療を学び, 悪霊を追い出して人々の病気を治した。医療費や報酬をいっさい受け取らなかった。イコンは小型の薬箱を持った姿で描かれることが多い。

れていました。意識が戻ったとき, わたくしは再び聖プロコーピイの聖堂の中へ連れ戻されていきました。わたくしはそこで声のかぎりに泣きわめきました。「わたくしを聖プロコーピイの聖堂の中へ入れないで！わたくしの中に住んでいる悪魔の軍勢のせいでわたくしはそこには居られないのです」悪霊たちが無理やりわたくしを引き戻すのです。それでもわたくしはなんとか彼らから身を引き離して聖プロコーピイの聖堂の中へ入りました。聖堂の中ではその時, 聖プロコーピイの奇蹟のうちの一つの話が朗読されていました。会衆がひしめくほど大勢いたので, わたくしは左側の聖歌隊席に座りました。聖堂の堂務者が聖ピロコーピイの柩の近くに座るように命じました。わたくしは堂務者の指図に従ってそこに座りました。そして, 見ると聖人の柩が揺れ動いたようでした。その恐るべき幻影に怖じ気づいてわたくしは聖人の柩に両手でつかまりました。

そしてわたくしは少しの間まどろみました。そして, えも言われぬ光とその光の中で神々しい美しい姿の乙女を見ました。その美しさは言葉ではとうてい言い表すことができません。そのお方は, 聖イオアンのイコンのそばの南門を通って聖イオアンの聖堂にお入りになりました。そして私のところへお出でになってわたくしの右肩をおさえて言われました。「主イイスス・ハリストス［イエス・キリスト］よ, 神の御子よ, 我らを憐れみ給え」しかしわたくしはなにも答えませんでした。そのお方は, 再び私に言われました。「ソロモニヤよ, “アミン”［“アーメン”］と言いなさい」わたくしは, なにも答えませんでした。そのお方は, 同じ祈りを二度, 三度唱えられました。神々しい乙女はわたくしに言われました。「ソロモニヤよ, “アミン”と言いなさい」わたくしは, やっとのことで“アミン”と答えました。そのお方はわたくしに言われました。「“アミン”と二度答えなさい」わたくしは, “アミン, アミン”と二度答えました。

聖なる乙女は, わたくしに言われました。「ソロモニヤ, あなたはわたくしが誰であるか, 知っているでしょうね？」わたくしは, そのお方に言いました。「お嬢様, どうしてわたくしが貴方様を知り得ましょうか。わたくしは自分の中に住む悪魔の軍勢のために悲惨な目に会っていたからでございます」いと聖なる乙女は言われました。「あなたがわたくしを知らないわけはないでしょう。あなたはわたくしの家へ五年間絶えず来ていたではありませんか」わたくし, 罪ぶかい者は言いました。「お嬢様, 貴方様のお家はどこにありますか？」そのお方は言われました。「わたくしの家は使徒大聖堂です。わたくしは, 自分の造り主であり, また神であるイイスス・ハリストスを肉の体として生んだ, 至聖生神女マリヤと呼ばれている者です。今日, わたくしはあなたに, わたくしの庇護者であり, わたくしのための祈禱者である聖なる義人プロコーピイとイオアンの力により, 恐れとおののきに満ちた聖にして大いなる奇蹟を示してあげましょう。あなたは, この聖人

に, あなたが癒されるように, 絶えず祈りをささげなさい。あなたの胎内には今七十の悪霊がいます。それにこれからも千七百の悪霊があなたに襲いかかるでしょう。しかしあなたは, 彼ら呪わしいものどもを恐れてはいけません。奇蹟者聖プロコーピイと聖イオアンがあなたを庇護し, 悪魔のもろい軍勢からあなたを救い出してくれるからです。従来どおりに, 道理にかなった方式で明確な十字のしるしをもって洗礼を授けてもらいなさい」さらに至聖童貞女は言われました。「奇蹟者聖プロコーピイと聖イオアンがあなたに約束事を求めるでしょうから, そのすべてにおいて言われたとおりの戒律を行なうことを約束しなさい」わたくし, 罪びとは, それに対してなにも答えることができませんでした。そのあと至聖童貞女は言われました。「ソロモニヤよ, あなたに平安あれ」そしてお出でになったのと同じ通路を通ってわたくしから去って行かれました。

わたくしは, この素晴らしい幻から我に返ると, 恐ろしさのあまり聖堂から逃げ出したくなりました。見ると, そばに自分の兄が立っていました。わたくしは恐ろしくなり, またその場に座り込んで, 眠りに落ちました。

わたくしは, 聖堂の中で今まで見たこともない大いなる光を見ました。そしてその光の中で聖プロコーピイが西門から聖堂に入ってこられるのを見ました。そして聖イオアンの柩のそばに立たれると, 聖イオアンが柩の中から起き上がりました。そして二人の聖人は, 罪びとであるわたくしのほうへ来られて, わたくしの前に立って言われました。「立ち去れ, 呪われた悪霊どもよ, 神の僕(しもべ) ソロモニヤから離れよ」そして聖人は私に言われました。「ソロモニヤよ, キリスト教徒の庇護者である至聖生神女ならびに聖なる義人プロコーピイとイオアンに心の底から祈れ。そうすれば, この日おまえは癒される。おまえは元の夫のもとへ帰らぬこと, そして他の誰にも嫁がぬことを, 我々に約束せよ。そしてソロモニヤよ, おまえにはなお厳しい苦しみが昼の三時間にわたって加えられるであろうが, そのあとで, おまえは完全に癒される。その間, おまえは三時間おまえの上で聖詠経を十二篇朗誦してもらうために十二人の司祭を呼べ。聖詠経が全部朗誦されない時は自分の聴悔司祭を呼んで痛解をさせてもらい, 一時(いっとき)の厳しい苦しみのために聖体機密を授けてもらうがよい」

幻で見た聖プロコーピイは, 髪の毛が豊かでその色は亜麻色, 顎鬚(あごひげ)はごく普通で亜麻色でした。衣服は短めで, 長靴をはき, 手に火掻き棒をお持ちでした。聖イオアンは, イコンに描かれているとおりで, 巡礼者のお姿でした。二人の聖人はさらに言われました。「おまえに平安あれ, ソロモニヤよ」そしてわたくしから離れてお姿は見えなくなりました。

罪びとであるわたくしは, このいとも素晴らしい幻から覚めて我に返り, 聖堂の外へ出ました。しかし私の兄と他の誰かがわたくしをつかまえて聖堂の中の聖プロコーピイの柩のところへ連れていきました。わたくし, 罪びとは, 声のかぎりに叫びました。「わたくしを聖プロコーピイのところへ連れていかないで！」しかし彼らはわたくしの言うことを聞こうともせず, 無理やりわたくしを聖堂の中へ引き入れました。わたくしは黙って聖堂の中にいましたが, わたくしの中に住む悪魔の軍勢のために立っていることができませんでした。それでまた兄に, わたくしを聖堂の外へ出してくれるように, 懇願しました。

わたくしは, 自分の住まいに帰ると, 意識朦朧となりました。やがてわたくしは, 奇蹟者聖イオアンが聖堂の中でわたくしに現れた自分の幻を独り言で語りはじめました。その家の中にはわたくしのほかには誰も居ませんでしたが, ただ家の外でわたくしの兄がわたくしの語る言葉に耳を傾けていました。わたくしは, 自分が誰と話しているのか, 誰に向かって話しているのか, 分かりませんでした。わたくしが話し終えて黙りこむと, 兄は至聖生神女使徒大聖堂へ行って, わたくしの聴悔司祭ニキータ神父にわたくしから聴いた事を話しました。ニキータ神父は兄にわたくしを使徒大聖堂に連れてくるように命じました。

兄と他の誰かがわたくしの手を引いて至聖生神女大聖堂へ連れていき, 聖堂内陣の前駆授洗聖イオアン［洗礼者ヨハネ］聖堂の中へ導き入れました。わたくしの聴悔司祭は, 兄から伝え聞いた幻についてわたくしに問い直しはじめました。わたくしは, 幻の全部を記憶しておりましたが, 悪魔に苦しめられて話すことができずにいました。兄は, わたくしの上で聖詠経を朗誦するように, 司祭に頼みました。わたくしの聴悔司祭と同じ大聖堂のシメオン司祭とがわたくしの上で聖詠経を朗誦しはじめました。すると, わたくしの中に住んでいる悪霊たちによるいっそう激しい苦しみがわたくしに加えられました。そのためわたくしは司祭の唱える言葉を聞くことができませんでした。わたくしは, 司祭たちがわたくしの上で聖詠経を朗誦しないように, そしてなお三時間の余裕を与えてくれるように, 「そうすれば, あなたさまがたにわたくしの幻が明らかになるでしょう」と泣きながら頼みました。司祭たちは, わたくしを聖堂から連れ出すように, 兄に命じました。兄と他の誰かは, わたくしの手を取って聖堂の外へ連れ出しました。

わたくしは意識朦朧となっていました。そして輝かしくも恐るべき幻を見ました。右側には, 歌いつつ行進する, 十字架と福音書を掲げ振り香炉とお香を持った司祭と輔祭の階層がいました。左側には, おびただしい数の悪霊が見えました。彼ら, 呪わしいものたちの姿かたちは青黒く, 狂暴で恐ろしく, まるで巨大な黒雲のかたまりのようでした。そ

して彼ら呪わしいものたちは, わたくしの顔に唾を吐きかけ, 鼻汁を引っ掛けました。わたくしは, 彼ら恐るべき狂暴なものたちの間を, 害を受けることなく通り過ぎました。至聖生神女の祈りと聖なる義人プロコーピイとイオアンの祈りのおかげで少しも苦しまずに済みました。

わたくしは, 自分の住まいに連れて行かれました。そこで聴悔司祭を呼んでくれるように頼みました。わたくしの聴悔司祭が来てくださり, わたくしに痛悔するように命じ, 恐るべき苦しみのために聖体機密を授けて祝福してくださいました。聴悔司祭はわたくしから去って行かれました。そのあと別の司祭と輔祭の方々が来られて, わたくしの上で聖詠経を朗誦してくださいました。その方々は, わたくしが死んだようになっており, わたくしのお腹が呪わしい邪悪な悪霊たちのために異常に膨れ上がっているのをご覧になって, わたくしの破滅を知り, ひどくお泣きになりました。

すると, 突然, わたくしの寝ている家の中に言葉でとうてい言い表すことのできない光が射してきました。そして蠟燭を持った若者がわたくしの家の中に入ってきて, それに続いて振り香炉を携えた司祭, さらにそのあとに義人聖プロコーピイと聖イオアンが入ってこられるのが見えました。聖なる方々は全員, わたくしの枕元に立って互いに何か話し合いをされました。その方々が何を話しておられるのか, わたくしには分かりませんでした。そして聖プロコーピイがわたくしに近づかれてわたしの胎に十字をお切りになりました。聖イオアンは手に小型の槍をもっていました。そしてわたくしに近寄ると, その槍でわたくしの胎を切り裂かれて, わたくしの中から悪霊をつかみ出して聖プロコーピイにそれを渡されました。悪霊は大声をあげて泣き叫び, 聖プロコーピイの手の中でのたうち回りました。聖プロコーピイは, わたくしにその悪霊を示して言われました。「ソロモニヤよ, おまえの胎の中から取り出した悪霊が見えるかね？」わたくしは悪霊を見ました。その姿は黒く尻尾があり, 口が分厚くて大きく恐ろしげでした。聖プロコーピイは, その呪わしいものを床に置き, 槍で突き殺しました。聖イオアンは, さらにわたくしの胎内から悪霊を一つずつ引き出しては聖プロコーピイに手渡しました。聖プロコーピイは, それらを次々に殺していきました。お二人の聖人は言いました。「ソロモニヤよ, これで我々は悪魔の軍勢の半分まで取り除いた。しかし完全な癒しは, わたしの家の中で, 聖プロコーピイの柩のそばで受けることになる」聖なる奇蹟者たちは言いました。「定められた三時間まで我々はここにとどまるべきではない」そして聖人がたは, わたくしから離れてお姿は見えなくなりました。

そのあと聖堂の聖プロコーピイの柩のそばで祈禱が行なわれ, 掌院, 修道院長, 長司祭はじめ大聖堂の司祭全員が, 水を聖別しはじめました。その間, 罪びとであるわたくしは聖堂の中へ運ばれて聖プロコーピイの柩のそばに置かれました。わたくしは手も足も動かすことができず, 舌も回らず, 自分の中に居残っている悪魔の軍勢のために死んだようになっていました。

突然, 大いなる光が私を照らしました。聖プロコーピイと聖イオアンが現われて, 以前見たのと同じお姿でわたくしの上に身をかがめるようにして立たれました。聖イオアンは聖プロコーピイに言いました。「ソロモニヤのそばに立って, 彼女の衣服を汚さないためにはどうすればよいか」聖プロコーピイは答えて言われました「ソロモニヤの衣服が汚れることはないし, 悪魔の軍勢によってわたしの家が穢されることもない」そこで聖イオアンは, 以前と同じように, わたくしの胎内から悪霊たちを引き出しはじめました。聖プロコーピイは悪霊を受け取っては聖堂の床にたたきつけて, ご自分の足で踏みつぶされました。それから聖プロコーピイは聖イオアンに言われました。「ソロモニヤの胎はそこに住みついていた悪霊どもから清くなったかね？」聖イオアンは答えました。「浄められました。胎に穢れはありません」それから聖プロコーピイは私の胎をご自分で調べて胎が浄められているのをご覧になりました。聖プロコーピイは言われました。「神に栄光あれかし」聖イオアンも言われました。「神に栄光あれかし」そして二人の聖人は私にも言われました。「ソロモニヤよ, おまえも“神に栄光あれかし”と言いなさい」わたくしの舌は, すぐに動いて言いました。「神に栄光あれかし」そして聖プロコーピイはわたくしに言われました。「ソロモニヤよ, この日からあの悪魔による多大な苦しみと病気からおまえは解き放たれて癒された。ソロモニヤよ, 今後, 悪魔の幻惑に襲われても恐れてはならない」さらに聖プロコーピイは言われました。「ご機嫌よう, ソロモニヤ, 大いなる神の審判の日まで達者でおれ」そこでご自分の御手で私を祝福して言われました。「神の恵みと我らの祝福が今よりのち永遠にあらんことを！右側の聖歌隊席へ行って, イイススに祈りをささげて“神に栄光あれかし”と言いなさい」そして聖人がたのお姿は見えなくなりました。

そこでわたくしは, このいとも輝かしい幻から覚めて我に返り, 自分の脚で立って目を上げ, 聖堂の中で太陽の光のような聖プロコーピイの聖像を見ました。そして聖堂の中を見回して我らの主イイスス・ハリストスの聖像を見ました。わたくしは, 自分の兄に尋ねました。「わたくしは聖堂の中に立って幻を見ているのでしょうか？」兄は言いました。「ソロモニヤ, ぼくの妹よ, おまえは聖プロコーピイの聖堂の中に立っているよ。奉神礼のただなかで聖なる福音経が読まれているところだ」そのあとわたくしは, 聖プロコーピ

イの柩に気が付いて大いなる喜びに満たされて小躍りして倒れ, 聖プロコーピイの柩にひざまずいて祈りをささげました。「おお, 神の光明よ, 義人プロコーピイ様, あなたは罪びとなる私を蔑(さげす)むことなく, 失われた子羊を捜し求めて邪悪な悪魔の手から救い出してくださいました。今や自分の胎内に悪魔の軍勢を感じることはまったくございません」

このいと輝かしい奇蹟を, 高位聖職者たち, 全司祭, 都市の長官たち, 全キリスト教徒が耳にして, 神と至聖なる神の御母, ウーステュグの奇蹟者, 聖なる義人にして神の僕(しもべ)プロコーピイならびにイオアンを讃(ほ)め称(たた)えた。そして鐘の音とともに祈禱の聖歌をうたい, それぞれの家路につき, 父・子・聖神(せいしん)の至聖三者［父・御子・御霊の三位一体の神］を讃美した。今も後(のち)も永遠(とこわ)に。アミン［アーメン］。

解　説

1.　テクストについて

この『悪霊憑きの女ソロモニヤの物語』 «Повесть о бесноватой жене Соломонии» のテクストに関する最も完備した総合的研究は次の書である。

Пигин А.В. Из истории русской демонологии XVII века. Повесть о бесноватой жене Соломонии. Исследование и тексты. СПб., 1998.

『悪霊憑きの女ソロモニヤの物語』（以下『物語』と略記）は 1670 年代にヴェリーキイ・ウーステュグにおいて当地の司祭イヤコフによって書かれた。『物語』は『ウーステュグのプロコーピイ及びイオアンの聖者伝』の一連の写本のなかのこの二人の聖人の「死後の奇蹟」の物語として読まれた。『物語』はおびただしい数の写本をともなって伝承された。現在, 130 以上の写本が知られている。作成された写本のうち 17 世紀のもの 63 本, 18 世紀のもの 64 本, 19 世紀のもの 3 本が伝存する。ピギンは, 130 の諸写本を 7 種類の編纂本に分類した。

(1) 基本版編纂本　Основная редакция
(2) 聖者伝版編纂本　Житийная редакция
(3) ザベーリン版編纂本　Забелинская редакция
(4) 拡張普及版編纂本　Распространенная редакция
(5) 特殊版編纂本　Особая редакция
(6) 簡易版編纂本　Краткая редакция
(7) 羅馬版編纂本　Римская редакция

この 7 種のうち(1)と(2)は, 最も初期の編纂本で, 1670 年代にほぼ時を同じくしてウーステュグの聖職者たちの圏内において作成された。この二種の版の編纂本においてのみ, 作者である救世主変容女子修道院の司祭イヤコフの名が記されている。

ピギンは, これら各種の版の編纂本の相関関係と伝承過程を文献学的・本文批評的に緻密に研究し, 各版各本の代表的テクスト 9 篇を, 全文を校訂して示している。

ここに翻訳した原典のテクストは, (1) の基本版編纂本の異文の一つで 17 世紀のトヴェーリの古写本をピギンが校訂したものであるが, ピギンの上記の単行本にはテクスト全文の記載はなく, 以下の書に所載されている。

Библиотека литературы Древней Руси. Т. 17. XVII век. СПб., 2013. С. 398-410 .

2. 『物語』の登場人物について

作品理解のために, まず登場人物から見ていくことにする。『物語』の登場人物の何人かは 17 世紀に実在した人物をモデルとしている。しかし悪霊に取り憑かれたソロモニヤを悪魔祓いによって救済したのは, 彼女よりも 3 世紀半以上昔に実在した聖プロコーピイである。それはこの聖人の死後の奇蹟であるから『物語』は, その設定からして, ファンタジーの作品である。

＜聖プロコーピイ＞ プロコーピイは 13 世紀の人であるが, 彼がロシア正教会の聖人として崇拝され「聖者伝」に記録されるようになったのは 16 世紀のことである。

『ウーステュグの聖プロコーピイの生涯』によれば, 世俗の人としてのプロコーピイは西方のプロイセン出身で, おそらくバルト海沿岸の海港都市リューベック Lübeck の生まれ。俗名は不明。父はハンザ同盟に属する富裕な貿易商であった。父の死後プロコーピイは, 遺産の財を船に積んでリューベックとノヴゴロドとを結ぶハンザ同盟の交易航路によって 1243 年頃ノヴゴロドに到着した。ノヴゴロドに着いたプロコーピイは聖ソフィア大聖堂をはじめとするあまたの教会・修道院の建築の壮麗さ, 聖堂の内部装飾の華麗さ, 奉神礼［礼拝式］の荘厳さに魅了されてローマ・カトリックから東方正教会へ改宗し, 積荷の商品と財をノヴゴロドの町の貧しい人々に分け与え, また修道院に寄付するなどして, 献身して “ユローヂヴィ юродивый”（日本ハリストス正教会の用語で「佯狂者」）の修行に入る。プロコーピイは, そのキリストに倣う無私無欲の生活のゆえにノヴゴロドの人々の尊崇を集めたが, のちにヴェリーキイ・ウーステュグに移動した。その町でプロコーピイは典型的な佯狂者の生活を送った。町と住民のためにほとんど夜を徹して祈り, 宿無しのため聖堂の入り口階段やごみの山の上, 地べたで仮眠をとった。施しで糊口をしのいだが, 施しは敬神の念の厚い人々からのみ受け, 金持からは受けようとしなかった。預言能力と社会批判は佯狂者の特徴の一つとされるが, プロコーピイは, ある時ウーステュグの

町が天変地異によって破壊されると予言し, 町がソドムとゴモラのように滅ぼされないように町民に悔い改めの生活を訴えた。町の人は誰もプロコーピイの言うことを信じようとしなかったが, しかし間もなく激しい暴風雨が起こり, 石の雨が降り注いだので住民はあわてて安全な大聖堂に避難したという（実際には 16 世紀にウーステュグの近くに隕石が降り注いだ）。ある夜, 凍てつく寒さのなかプロコーピイはシメオンという聖職者のもとを訪れたさい, シメオン神父の息子がやがては聖人になると予言した。その息子がペルムの聖ステファンであるという（ペルムの聖ステファンは 1340 年ころヴェリーキイ・ウーステュグに生まれているが, 14 世紀の人であるから時代錯誤）。[7]

ロシア正教会では奇蹟を行なう大徳を «чудотворец»（日本ハリストス正教会の用語では「奇蹟者」）と言い, 聖プロコーピイは, 彼の聖なる愚者の行動に倣って佯狂者となった聖イオアンと共に「ウーステュグの奇蹟者」と呼ばれる。

ウーステュグのイコンに描かれている二人の佯狂者の姿を見ると, 聖プロコーピイは, 中年, 頭髪は亜麻色, 右肩から垂れ下がっている衣は粗布で赤紫色, 手に 3 本の火掻き棒を持ち, 長靴は破れて, 膝がむき出しになっている。聖イオアンは, 顎鬚が生えはじめたばかりの若者で, 衣服は着古して破れた白いシャツ一枚で, 黒ずんでおり, 肩はむき出しで肋骨が見え, 膝から上の脚が裸である。[8]

聖プロコーピイは, 聖イオアンの協力を得て悪霊憑きのソロモニヤの胎を切り開き, 悪霊を取り出して聖堂の床に叩きつけて手に持った火掻き棒で悪霊を突き殺すが, 翻訳の底本にした写本テクストでは, 火掻き棒ではなく槍を用いて悪霊を退治する。

＜悪霊憑きの女ソロモニヤ＞　ロシアでは悪霊に取り憑かれた女を“クリクーシャ кликуша”という。民間信仰によれば, 悪しき呪術師（“ヴォルフヴ волхв ”あるいは“コルドゥーン колдун”）の呪いを受けた女性の胎内に悪霊が入り込んで叫び声をあげ, 女性を極度のヒステリー状態にさせる。悪しき呪術師の呪いによって引き起こされる病気を“ポルチャ порча”という。この“ポルチャ”に罹った女性クリクーシャは, 体を痙攣させ, 口から泡を吐き, 顔面を歪めて, 大声で喚く。悪霊に取り憑かれたクリクーシャは, 一般的な特徴として“聖なるもの”を恐れ, 聖体礼儀の“ケルビムの歌”に堪えることができない。“ケルビムの歌”が歌われているあいだ狂暴に荒れ狂う。クリクーシャは, 聖堂の外に連れ出されると土を口に入れて噛み, 神を冒瀆する罵詈雑言を吐く。「天主経」［主の祈り］を唱えることができない。十字行を見るといらだち, 叫び声をあげて罵る。聖堂の中では司祭が近づくと発作が激しくなる。振り香炉の匂い, 福音経の朗誦を嫌う。発作が起きていない時は, あくびが出る―これは悪霊が体外に出ている時。発作が起きている時は, 腹が膨

[7] Dmitrij Čiževskij, *History of Russian Literature. From the eleventh century to the end of the baroque* (‘S-Gravenhage: Mouton&Co., 1962), pp. 244-245.
[8] *Библиотека литературы Древней Руси*. Т. 17. С. 630.

張する―これは悪霊が胎の中でもがき暴れる時。ウラジーミル県でのクリクーシャの病状の事例によれば, 聖堂に連れられてきたクリクーシャは, 聖体礼儀が始まると, 叫び声をあげて瀆神的な言葉を吐き, 司祭をののしるので, 奇蹟者のイコンの前へ連れ出され祈禱をしてもらうと, 意識を失って倒れた。一時間ほど倒れていたが, 聖水を浴びせられ, 福音経が朗誦されると, 発作がおさまり, 意識を取り戻した。[9]

悪しき呪術師の呪いによる病気は治りにくく, 呪いをかけた呪術師に呪いを解除してもらうか, 別のさらに有力な呪術師に助力を求めるか, のほかには治療の方法はないとされた。教会に助けが求められた場合は, 司祭がクリクーシャの上で聖詠経を朗誦するのが唯一の救済法であった。『物語』の主人公ソロモニヤはクリクーシャの典型である。ソロモニヤに呪いをかけたのは誰か？ソロモニヤを破滅させようと思いついたのが,「悪魔自身の考えによるものか, それともどこかの邪悪で狡猾な人間の差し金によるものかは, 分からぬが」と多くの写本テクストは記している。悪魔自身の企みと解釈するのが無難な読み方であろう。ソロモニヤに悪霊を送り込んだのが,「どこかの邪悪で狡猾な人間」であるとすれば, それは悪しき呪術師（妖術師）に相違ない。現に「ヴォルフヴ волхв」（聖者伝版／特殊版編纂本）「邪悪な妖術師 еретик」（ザベーリン版編纂本）と記しているテクストがある。呪われたクリクーシャは, 発作を起こして叫びわめくとき, 自分に呪いをかけた悪しき呪術師の名前を口走るという。中世ロシアではクリクーシャが口に出した名前によって妖術師の存在が知れて, 官憲による妖術師の捜索・追跡が行なわれた。『物語』ではそのような妖術師は登場しない。ソロモニヤが悪霊に取り憑かれるようになった原因は, 悪しき妖術師の介在によるものではなく, 幻の中で聖フェオドーラが明らかにしたように, 彼女に嬰児洗礼を施した司祭が酔っ払いで, 不完全な洗礼を施したことによる。生まれたばかりの嬰児は魔物にさらわれやすい。昔のロシアでは嬰児洗礼は一種の魔除けの儀礼であった。ソロモニヤの受けた洗礼は, 不完全で無効であったために, 悪魔にその隙を狙われることになった。

＜夫マトフェイ＞　不可解な男である。名はマトフェイあるいはマトヴェイで, ほとんどすべての写本が「農夫 земледец」としている。両親が娘を「正式結婚 законное сочетание」させるために選んだ婿であるから, おそらく善良な人間であったに違いない。婚礼の日の初夜, マトフェイは «телесныя ради нужды»「体の要求により（＝便意をもよおして）」家のドアの外へ用足しに出た（中世ロシアの農家では便所は家屋の外に設けられていた）。そのわずかな隙をついて悪魔が, つむじ風, 青く燃え上がる炎となってソロモニヤの体の中に入り込んだ。その三日目にソロモニヤは自分の胎内に狂暴な悪霊が宿ったこ

[9] *Новичкова Т.А.* Русский демонологический словарь. СПб., 1995. С. 238-242.; *Прыжов И.Г.* Двадцать шесть московских дур и дураков. М., 2008. С. 149-182.

とを感じた。婚礼後九日目の夜のこと, ソロモニヤは夫マトフェイと同じ部屋にいて就寝しようとしていたところに悪霊が目に見える姿をとって現われた。それは,「毛むくじゃらで鋭い鉤爪を持った獣」でソロモニヤに寄り添って横になった。ソロモニヤは気を失うが, その間, 野獣は猥らな振る舞いで彼女を穢した。夫にはそれが見えなかったらしい。その後, 悪霊たちは, 複数の人間の姿で現れてソロモニヤを襲うが, その姿は人の目には見えなかったという。ソロモニヤは意を決して, そのことを夫に告白したが, 夫はなにも答えなかった。その後しばらくの時が経って, 夫は妻の憔悴しきった様子を見て, 妻を実家へ帰す。これが, 夫マトフェイがとった無言の行動である。

イヴァン・プルィジョーフは, ソロモニヤの病気は, 夫との不和, 他の男たちとの恋愛関係が原因である, と考えている。[10] 常識的に考えれば, そうかもしれない。

そうだとすれば, ソロモニヤの父親は, 娘に結婚前にすでに恋人がいるのを知りながら, 世間体をはばかって, おとなしい無難な男を婿に選んで「正式に」結婚させたことになる。そうなると, ソロモニヤはふしだらな娘にすぎず, 悪霊たちの存在は, 世の悪童・不良青年たちのイメージに還元されてしまう。

マトフェイが終始無言であることは, 彼自身が悪霊世界に通じていたことに起因するという推測も成り立ち得る。ある写本は, マトフェイを単なる「農夫」ではなくて「家畜の放牧者 пастух скотский」としている。家畜を放牧する牧人は, 農耕者よりも悪霊と接触する機会が多い。たとえば, 自分の放牧する家畜が失われないようにするために, 森のデーモンのレーシイに犠牲をささげる, 何かの贈物する, などの宥和の取引をすることがある。魔界と接触したマトフェイが悪霊の手先として利用された可能性はある。ソロモニヤの見た幻の中で聖プロコーピイは, 彼女に「元の夫のもとへ行かない」ことを約束させる。悪霊に取り憑かれたソロモニヤを立ち直させるためにウーステュグの教会に連れていったのは, 彼女の実の兄であり, 夫ではなかった。『物語』の中でマトフェイは好ましい人物としては描かれていない。

＜悪霊＞　『物語』のなかで「悪霊」を表す言葉は, 多くの場合 «бесы» あるいは «демон» であり, 両者はほぼ同じ意味に用いられ, まれに «нечистый дух»「不浄な霊」と表現される。それらの悪霊たちの姿は, フォークロアの「チョルト черт」を想わせるが, «черт» という語は用いられていない。神の敵対者としての「悪魔」は «диявол сатана» である。『物語』のなかの悪霊たちは, ビザンツ文学系統の「聖者伝」に見られる悪霊の表象よりもロシアの民間伝承における水のデーモン「ヴォヂャノイ водяной」, 森のデーモン「レーシイ леший」などの自然の精霊に似ている。

[10] Там же. С. 156.

悪霊たちには «окоянный» 「呪わしい, 呪うべき, 忌まわしい」«темнообразный» «темнозрачный»「黒い姿かたちの」という形容語句（epithet）が必ず付いている。最初にソロモニヤの胎内に入り込んだ悪霊だけは, 姿かたちを見せず「何かつむじ風のようなもの」「青く燃え上がる炎のようなもの」と表現されている。これが悪魔の本来の姿であろう。

『物語』における悪霊は, サタンを「父」と仰ぐ下僕であり, 女主人公にキリスト教信仰を棄てさせるために彼女を苦しめる。その点においてはビザンツ伝来の聖者伝の悪魔像を継承している。しかしその他の面において悪霊たちのイメージは, ロシアの民間伝承のデーモンの形象の反映である。一般に民間伝承における悪霊は好色であり, 女性略奪者である。悪霊たちは, さまざまな人間の姿をとって父の家にいるソロモニヤを襲い, その後, 水の中の彼らの住まいに連れ去る。

＜水のデーモン＞　民間伝承によれば「ヴォヂャノイ」は人間の女性を愛人として妊娠させ, 子どもが産まれると, 水底の水晶造りの宮殿に連れ去る。『物語』のなかの悪霊たちは, 一部は水のデーモンでもあり,「ヴォヂャノイ」を想わせる。

悪霊たちは, ソロモニヤを略奪して情交をむすぶ。水のデーモンたちは, 苔, 草を食い, 鳥の血を飲み, 葡萄酒を飲む。死ぬ時は雷に打たれて死ぬ。彼らは多産であるため産婆がいる。ソロモニヤのお産の世話に来た「黒い姿かたちの女」はそれである。子どもが生まれると, 彼らは誕生祝の宴会を催す。悪霊たちの世界には階級制・年功序列がある。宴席につくさい, 彼らは, それぞれ決まった席に着き, 互いに功績を褒め合い, 尊敬し合う。

＜ヤロスラフカ＞　水のデーモンに囚われているあいだ, ソロモニヤはヤロスラフカ Ярославка という不思議な娘と仲良しになる。ヤロスラフカはソロモニヤを助けようとして助言を与える。いくつかの写本のテクストにおいてヤロスラフカは, 自分が悪霊たちの家にいる理由を話している。「わたしはヤロスラーヴリ Ярославль の町の生まれです。生まれるとすぐに, 母がわたしをここの黒い姿かたちの者たちに引き渡したのです」（聖者伝版編纂本）。「わたしの生まれた町はヤロスラーヴリです。わたしは母に呪われてこの黒い姿かたちの邪悪な悪霊たちに引き渡されたのです」（特殊版編纂本）。「悪霊たちのもとにいた娘ヤロスラフカは, 自分がキリスト教徒の出であった身を明かした。娘が言うには『どこかの悪魔の妬みによってわたしの母が呪いの言葉を口に出してしまったのです』それでその娘は悪霊たちの虜（とりこ）となった」（簡易版編纂本）。民間信仰によれば「呪われた子 про́клятые」という妖怪化した人間がいる。ヤロスラフカは, 生まれて間もない赤ん坊の時に母親に呪われた, と言っている。両親の呪いは, 幼い子どもにとって危険である。母親が, 駄々をこねる子や母乳を飲みたがらない赤ん坊（特にまだ洗礼を受けていない）に腹立ちまぎれについ「おまえなんか, 悪魔（水の魔物, 森の魔物）にさらわれてしまえ！」などと呪いの言葉を浴びせると, 呪われた子は, 間もなく行方不明にな

り, 水や森の悪霊の支配下にはいる。水の魔物にさらわれた女の子は溺死して「ルサールカ русалка」という水の精になると信じられた。ヤロスラフカの名を記さずにルサールカとしている写本もある。「悪霊たちにさらわれて彼らのもとにいる娘ルサールカにソロモニヤの世話をさせた」（羅馬版編纂本）。ヤロスラフカは, 悪霊たちの世界にあって自身も水のデーモンでありながら, ソロモニヤを苦難から救出する方法を教えた唯一の人間的な善の存在である。

＜森のデーモン＞　水を住処とする悪霊たちの大半が雷に打たれて滅びたあとに, 彼らに代わって登場するのが,「水のデーモンの兄弟」と称する森のデーモンである。

民間伝承の「レーシイ」を思わせる悪霊たちは, 日が暮れると群れを成してソロモニヤの父親の家へやって来て「水の仲間」から譲り受けて自分たちのものとなった「囚われびと」を返せ, と大声をあげて父親に要求する。その声は, 野獣の咆哮のようで「家を毀さんばかりであった」。レーシイは, 森の中, 山の中の木霊の化身でもあるからその声は大きく不気味である。レーシイは, 森に野イチゴやキノコを採りに来た女性をかどわかす森の悪霊である。彼らは, ソロモニヤの父親に, 娘を渡せば金・銀・財宝をやる, と言う。昔話における悪霊は, 概して金持ちであるが, 彼らの金・銀・財宝は, 現実に立ち帰ると塵芥（ちりあくた）に変わる。『物語』の中の森のデーモンは, 姿は見えないが, たまたまウーステュグの町から来ていた聖職者・教会人たちと口論をし, そこに居合わせた人々の罪悪を暴き出す。この悪霊たちは, 特に危害を加えることなく退散する。どこか人間臭いところのあるデーモンたちである。そのためか, ソロモニヤを苦しめた悪霊たちは, 現実には 17 世紀に多く見られた「流れ者たち сходцы」が集まって森を根城として略奪を繰り返すようになった山賊集団である, あるいは司祭の娘に暴行を加えた神学校の悪童たちである, と説明する観方（例えば, A. B. Амфитеатров）もあるが,[11] このような一種の「非神話化」的解釈は, 作品理解から遠いように思われる。

3.　幻と現実

『物語』の中では女主人公の胎内にいる悪霊が引き起こす心の病気（発作）とそうではない体の病気とを区別しているところがある。悪霊たちは, 家の中に独りでいたソロモニヤをボールのように家の隅や暖炉の上に向かって放り投げて遊び, 体に石臼をロープで巻き付けて天井に吊るすなどして長時間にわたって苦しめた。そのためソロモニヤは体じゅう青黒く打ち傷だらけになっていたにもかかわらず,「体には何の病気も感じなかった А болезни она никакоже чюяше на теле своемъ」という。 ソロモニヤの聴悔司祭（写本によっては父親のディミートリイ司祭）が, ヤロスラフカに教えられたとおりに, 悪霊た

[11] *Пигин.* Из истории русской демонологии XVII века. С. 11.

ちをそれぞれの名をあげて聖堂の至聖所で呪詛してからは, その効果があり悪霊たちはしばらくの間ソロモニヤから離れた。その時, ソロモニヤは「体の病気に陥った в недуг впаде」。その病気の間にソロモニヤは, 聖フェオドーラを幻で見る。聖女の幻が消えると, 悪霊の軍団がソロモニヤの胎にもどってくる。

聖フェオドーラの教えに従い, ウーステュグの諸聖堂を訪ね, 奇蹟者聖プロコーピイ聖イオアンの聖堂に入ると, 悪霊たちがソロモニヤの胎を引き破って外へ一時脱出したので, 再び彼女は「体の病気に陥った」。その病気の間, ソロモニヤは聴悔司祭に痛解［告解］して司祭から聖体を拝領して健康を取り戻した。ソロモニヤは, 元気になったので, 父の家に帰ったため悪霊たちがまた彼女の胎内に戻った。ソロモニヤはウーステュグの聖プロコーピイと聖イオアンの聖堂に連れ戻される。その聖堂での聖体礼儀の最中, 悪霊たちがソロモニヤを聖堂の床に激しい勢いで投げ倒した。ソロモニヤの腹が異常に膨れ上がり, 胎内の悪霊たちが子豚のように呻いた。彼女は意識を失った。意識はなかなかもどらなかったが, ソロモニヤは教会を離れずにいた。

そしてある日, 浅い眠りの中でソロモニヤは再び聖フェオドーラの幻を見る。聖フェオドーラは, ソロモニヤに「あなたが悪霊のためにさんざん苦しんだのは, 酔っぱらった司祭があなたに洗礼を施し, しかも聖なる洗礼の儀式の半分しか遂行しなかったのが原因です」と言って病因を明らかにする。その後, ソロモニヤは教会へ通い続けるが, 聖体を拝領するたびに悪霊が暴れだして彼女の胎を引き裂く。ある時は, ソロモニヤは左脇腹を噛み破られ, 実際に血に染まったシャツを居合わせた人々に示す。またある時は, 聖体を拝領すると悪霊がソロモニヤの口を借りて「よくもわたしを焼いたな！」と大声でわめいた。悪霊にさんざん苦しめられたソロモニヤは, 疲れ果てて眠りにおちた。そのとき夢の中で聖プロコーピイと聖イオアンの幻を見て, 自分の救われる日が近いことを知る。

1671 年 7 月 8 日聖プロコーピイの命日記念祭の日, ソロモニヤは, 聖プロコーピイと聖イオアンの奇蹟の治療によって自分の病気が完治したことをウーステュグの至聖生神女大聖堂において全聖職者と全会衆の前で告白する。『物語』はそこからソロモニヤの一人称の語りに転じる。

聖プロコーピイと聖イオアンによる悪霊退治は二度にわたって行なわれた。一度目はソロモニヤの住まいの中で, 聖プロコーピイがソロモニヤの胎の上で十字を切り, 助手格の聖イオアンが小槍で彼女の胎を切り裂き, その中にいる悪霊を一つずつ取り出して聖プロコーピイに渡す。聖プロコーピイは悪霊を床に置いて 火掻き棒（翻訳に用いた写本テクストでは槍）で突き殺す。二度目は聖堂の中で, 同じように聖イオアンがソロモニヤの胎から取り出した悪霊たちを聖プロコーピイが―聖堂を血で穢さないように―床に叩きつけて足で踏みつぶす。「火掻き棒 кочерга」は聖プロコーピイの象徴的付属物。火掻き棒は, かまどの火を掻き起こす鉄製の棒である。一般に悪魔は鉄を恐れるので, 鉄製の

火掻き棒は 悪霊退治に有力な武器である。しかしそれに加えて，ピギンは，悪霊退治に有効な火掻き棒に別な意味を持たせている。悪霊は好色で，多産である。ソロモニヤが産み落とした悪霊の子は十ぐらいのはずであるが，いつの間にか彼女の胎内にいる悪霊の数は七十に増えている。ロシアのフォークロアでは，火掻き棒は多産のイメージと結びつく男根の象徴である。多産の象徴物で多産な悪霊を滅ぼすのは，「毒を以て毒を制す」荒療治であり，ユーモラスでさえある。[12] この第一回目の悪霊退治ではソロモニヤの胎内にいる悪霊の軍勢の半分しか除去できなかった。二回目は聖プロコーピイの墓（柩）のそばで同じようにして行なわれて，ソロモニヤの胎は完全に浄められた。聖プロコーピイは言う。「ソロモニヤよ，今日からあの悪魔による大いなる苦しみと病気からおまえは解き放たれて癒される」このようにしてソロモニヤの病気は幻の中で癒される。

ソロモニヤに対する悪霊たちの凄惨な暴虐非道は，『物語』の編纂者によって客観的な現実として描写されるとともに，ソロモニヤの幻想としても扱われている。聖人たちとの邂逅がソロモニヤの幻の中の出来事として描かれているのにたいして，ソロモニヤの悪霊との遭遇は，主として，現実に起こった事件として記述されている。悪霊の引き起こした事件に直接関与しているのはソロモニヤ自身と聖人たちだけで，他の登場人物は，ソロモニヤの憑依状態の目撃者にすぎない。肉親をはじめ『物語』の主人公に関わる人々は，悪霊たちの声は聞くが，姿は見ていない。人々の目に見えるのは，悪霊たちの仕業の結果だけである。

4. 死と復活

この作品は，悪霊憑きの女性の個人的な神秘体験を「奇蹟者 чудотворец」として尊崇されたウーステュグの聖プロコーピイおよび聖イオアンが死後に行なった，生前に勝る大きな奇蹟と結びつけることによって，そこに終末論的意味を付与した物語である。ソロモニヤの内なる七十の悪霊は滅ぼされたが，彼女の外にはなお千七百の悪霊の軍勢がいる。聖プロコーピイは，最後に彼女に言う。「ソロモニヤよ，今後，悪魔の幻惑に襲われても，恐れてはならない。大いなる神の審判の日まで達者でおれ」。

救われた人も，なおも襲い来る悪魔の試練に耐えて，最後の審判を待たなければならない。悪魔の軍勢が完全に殲滅されるのは，最後の審判の日である。「動乱」による国情の不安定で幕を開け，総主教ニコンの典礼改革が招いた教会の分裂による動揺の波が全地に広がった 17 世紀のロシアには，民衆のあいだにも一種の終末感覚があった。

中世人の観念によれば，悪霊による憑依状態そのものが，「死」の変種である。魔に取り憑つかれた人の発作は，一時的な死と見なされた。『物語』の女主人公は，幾度か発作

[12] Там же. С. 116-117.

によって一時的に死ぬが, 死ぬたびに幻を見ることによって生へと蘇る。繰り返される死と復活, 一時的な死がそのまま最終的な死に直結せずに,「聖なるもの」の介在が復活の希望への橋渡しとなっていることに 終末論的な緊張観が読み取れる。

『物語』には, ビザンツ文学伝来の「聖者伝」の悪魔観と, ロシアの「民間神話」の悪霊観とが交錯している。ソロモニヤは, 悪霊に取り憑かれた「死」の状態のまま, 民間信仰の悪霊たちの「死の王国」である水や森の世界に連れて行かれる。そこは死者の世界と生者の世界との明確な境界がないフォークロアにおける神話化された空間である。ソロモニヤは, 水や森の神話的「死の世界」から半死半生の体(てい)で帰ってきて, 両親を驚かせる。そのようなソロモニヤの状況は, 悪霊たちに責め苛められる罪人を描いた最後の審判の「地獄絵」を想わせる。そこには救済の望みの光は見られない。

花嫁たるソロモニヤが悪魔に取り憑かれたのが, 婚礼の直後の出来事とされていることにも, 神話的な意味がある。ロシアの民間伝承では「婚礼」は花嫁にとって異界への旅立ちとして表象される。昔のロシアでは一家の主である男性は暴力体質の暴君であることが多く, そのような男性のいる未知の他家へ嫁ぐ日の婚礼は, 若い花嫁にとっては死の世界への移行を象徴する通過儀礼であった。そのことは婚礼歌が「泣き歌」となっているフォークロアに例を見ることができる。

ソロモニヤはそのような「生」と「死」の境界に立たされている女性である。

5. 「洗礼」問題

ソロモニヤは, すでに新生児の時点で「死」の瀬戸際に立たされていた。それは, 幻の中で聖フェオドーラが告げ知らせたように, 酔っぱらった司祭が洗礼の儀式を完了しなかったため, ソロモニヤの受けた嬰児洗礼が無効であったことによる。

ロシアの民衆の通念では新生児の「洗礼」が一種の「魔除け」の儀礼であったことはすでに述べたが, その問題をここで再考しておきたい。

ロシア人の世界観によれば, 赤ん坊は「神の贈物 Дар божий」である。赤ん坊は, 洗礼によって名前が与えられるまでの期間は, 一様に「神から与えられたもの」を意味する「ボグダン Богдан」「ボグダシュカ　Богдашка」という仮名で呼ばれた。赤ん坊は, 一方では, 神の贈物であって清浄無垢なものと考えられたが, 他方では, 不浄なもの, 危険なものとさえ見なされた。極端な例をあげれば, 分離派のパニアシュカ教徒 Паниашковцы（サマーラ県の分離派のセクトで鞭身派に近い）は, 女性を「生神女 богородицы」と呼び, 幼児を「悪霊　бесы」と呼んだ。このような二通りの新生児観は, 新生児が原初的に「異界」に属するものとする考え方に由来する。東スラヴ人の出産儀礼の資料から観て, 新生児は, 一連の儀礼が完了するまでは人間と見なされない。いわば「非人間 нечеловек」である。

「洗礼」の基本的な意味は, 非人間を人間に変えることにある。新生児は, 洗礼を受けるまでの期間は非存在である。非存在である新生児が死亡した場合, 墓地に埋葬されずに,「胞衣(えな)」［出産時に赤ん坊と一緒に胎内から出る胞衣は赤ん坊の双生児と見なされた。赤ん坊はみな, 双子として生まれ, 一方は生を受けて世に出るが, 片方の胞衣は死産児として葬られた］を埋める特別の場所に埋葬された。

ポレシエのジトーミル地方では, 洗礼を受ける前の赤ん坊は,「幽霊 «маняк»」と呼ばれ, 受洗後に初めて「こども «дытына» 」と呼ばれる。[13]

ロシアの正教徒の見地からすれば,「洗礼」は, 人間の第二の誕生であり, またそれ以上に「神の似姿 Imago Dei」による真の人間の誕生である。洗礼を受ける前の赤ん坊は, 民間信仰によれば, 原罪が取り去られていないという観点から「小鬼 чертенок」である。生まれたばかりの赤ん坊は, 外見上はまだ可愛らしいとは言えず, 汗の臭いがして, 顔が赤い。それが洗礼を受けた後は, 顔が白くなり, 良い匂いがする。洗礼を受けていない新生児を不浄なものと見なして, いくつかの地方では, 未受洗の赤ん坊を看護するにあたって, 乳房を含ませない, キスをしてやらない, ゆりかごに寝かせない, 産着を着せない, 十字架を付けてやらないことがある。不浄な新生児は,「不浄な力」（悪霊）に攫(さら)われやすい。そのため両親, 親族は, 赤ん坊の洗礼を急いだ。早い場合は, 誕生後三日目に赤ん坊に洗礼を受けさせた。[14]

6. 再洗礼

未受洗状態のソロモニヤを悪霊から救うには, 新たに正規な洗礼を受けさせるほかはなかった。聖フェオドーラは言う。「ソロモニヤよ, あなたは従来どおりの方式により正式に洗礼を受けなさい」。聖プロコーピイと聖イオアンも同じことをソロモニヤに言う。「従来通りの方式で正式に十字架のしるしによって洗礼を受けよ」。至聖生神女もまた同じことを言う。「そして従来通りに, 道理にかなった方式で明確な十字のしるしをもって洗礼を授けてもらいなさい И крестися разумно и внято крестным знамением, якоже и прежде сего 」。

この文言に「三本指での十字を切り方 троеперстие」（親指・人差し指・中指の三本を立てて十字を切る）と「二本指での十字の切り方 двуперстие」（右手の人差し指と中指を立て, 薬指と小指を親指に添えて十字を切る）との相異の問題に関する暗示があるとして, 1650～1660 年代における教会改革の問題の反映を見る研究者がいる。

---

[13] *Байбурин А.К.* Ритуал в традиционной культуре. СПб., 1993. С. 41.

[14] *Листова Т.А.* Ребенок в русской семье. Рождение, крещение. 2-я половина XIX-XX в. // Обычай и обряды, связанные с рождением ребенка. М., 1995. С. 36.

「従来どおり」の方式をニコンの典礼改革以前の二本指による十字の切り方と観れば,『物語』の作者のイヤコフは古儀式派の信仰に立つ司祭と解釈できる。反対に, 三本指による十字の切り方が「従来の方式」と考えれば,『物語』はアンチ古儀式派の作品となる。1551 年にイワン雷帝の参加のもとに教会総会義で制定された教会法『百章』には「キリストが為されたのと同じく二本の指で祝福を授けない者, 十字のしるしをつくらない者は呪わるべし」と規定された箇条を固く守ったのが古儀式派である。『物語』の文脈からはこの規定を「従来どおり」の正式な十字の切り方と読むのが自然と思われる。しかし作者のイヤコフは, 当時ヴェリーキイ・ウーステュグの諸聖堂の司祭団の長の位置にいたことから古儀式派のイデオロギーの代表者とは考えにくいが, 聖職者たちの精神的頽廃・道徳的堕落に対する批判は手厳しく, その点においては古儀式派の精神に通じるところがあった。『物語』が作成されたのは 1671 年ごろで, 1652 年に開始されたニコン総主教による典礼改革から 20 年程度の時間しか経っていない時代であったから, 教会聖職者のあいだにも典礼改革に関しての意識改革がまだ徹底していなかったことも考えられる。

『物語』において教会分裂の現実が反映されているかどうかの問題については, まだ議論の余地が残されている。[15]

7. ヴェリーキイ・ウーステュグの宗教生活

ソロモニヤが悪霊から解放されたのは 1671 年のこと。1639 年から 1669 年にかけて大聖堂広場の聖堂群の建造が行われ, 1669 年にはソロモニヤの病気が癒された場の聖プロコーピイ聖堂が石造りに改築されて成聖［聖別献堂］され, 大聖堂広場は様相を新たにした。その年,『物語』の作者イヤコフ司祭はヴェリーキイ・ウーステュグの司祭団の長に選出された。彼がこの聖堂の成聖祝賀事業において重要な役割を演じたことには疑いを容れない。1682 年にはウーステュグ府主教管区が形成され, ヴェリーキイ・ウーステュグが北ロシアの宗教的中心としての意義が増大した。それとともに聖プロコーピイ, 聖イオアンをはじめ地方的聖人の崇拝が高まった。しかし, 大聖堂群の威容と聖人たちの偉大さ・名声とは正反対の対極をなしたのは, 大聖堂広場の空間に生活する悪霊に取り憑かれた人々の風紀紊乱があった。例えば, 聖プロコーピイ聖堂のアンドレイ司祭の府主教あての報告によれば, 大天使ミハイル修道院の掌院イグナティイは,「絶えず飲酒にふけって」いて品行方正の模範ではない, 彼（アンドレイ）の属する聖プロコーピイ聖堂の堂務者は窃盗罪で解雇されている。また同じ聖堂の輔祭ディミートリイは「酔っぱらって至聖所に入

[15] *Пигин.* Из истории русской демонологии XVII века. С. 12.

り, こっそり酒を飲んだ」うえ, アンドレイの顎鬚を引っ張り, 片方の手で平手打ちを食わせた。聖職者の飲酒癖, 泥酔, 放蕩は, 教区信徒の信仰心の喪失をもたらす。

『物語』には聖職者の堕落への批判が込められている。ソロモニヤの苦難を, 教会の典礼の純粋性を破壊し, 神の戒律から逸脱する人々への警告として示すことが『物語』の編纂者の意図であった。[16]

8. 結語

17 世紀はロシア文学史のなかで特別な位置を占めている。それは, 中世文学から近世文学への過渡期の時代であり, 新しい文学ジャンルが形成された時期, 文学とフォークロアのジャンル体系の相関関係が成立した時期, 著作者層の個人化が生じた時期である。17 世紀後半は都市の役割が著しい重要性をもつようになった時代であり, 抬頭しつつあった小市民社会のなかから識字能力のある知識人層が形成されるに至った。新知識人層はロシアの口承文芸を伝統的な文学（宗教文学）とむすびつけ, そこに取り込むことができるようになった。『悪霊憑きの女ソロモニヤの物語』は,『ウーステュグのプロコーピイ及びイオアンの聖者伝』の一連の写本のなかに組み込まれた両聖人の「死後の奇蹟」の物語として広く読まれた。物語の基底には「女性と悪霊との同棲」のテーマがある。このテーマは中世後期のヨーロッパでは物語として広く流布していたが, 中世ロシアではかなり稀な表象である。物語の中の神話的モチーフと形象のいくつかは, フォークロアの幻想的魔法昔話や「ヴィリチカ」と呼ばれる「神秘体験奇譚」に起源をもつ。聖人の死後の奇蹟や個人の神秘体験の物語はファンタジーではあるが, そこに見られる出来事は, 架空の時空における幻想ではない。現実的な時間, 空間, 事件の細部, 目撃者, 証言者, 語り手を必要とする物語である。これらの条件が揃わなければ, 奇蹟は奇蹟とはならないし, 神秘体験もない。『物語』の時は 1661～1671 年, 場所は北ロシアのウーステュグの村と都市, 神秘体験の当事者（語り手）, 奇蹟行為者, 目撃者（親族, 隣人）, 証言者（「この地方にはこの悪魔の奸計を証言できる人々は多くいる」）の条件が揃った上での超自然的な出来事の物語であり, 作者自身「そは, 我らの時代に実際にありしことなり」と序文で断っている。『物語』は, 悪霊の世界と人間の苦難の描写において事件の細部を詳細に写実している。

この『物語』は, チジェフスキイが言うように「文学的な見地からすれば, きわめてひ弱な作品（From the literary point of view , the tale is quite weak）」[17] かもしれないが, 17 世紀のロシア文学にとって最も重要なテーマである人間と悪の力との抗争, 人間の悲劇的な運命の問題を設定し, 練り上げた作品である。『物語』は, 人間の弱さ, 悪の恐るべき力と

[16] Там же. С. 70-71.
[17] Čiževskij, *History of Russian Literature,* p. 336.

の絶望的な苦闘について素朴に考察しながら, 原初の神の力が悪の原理に最終的に勝利することをいささかも疑わない終末観においては中世の「聖者伝」の伝統を継承しつつ, 悪の力を民間伝承の神話的な悪霊形象とむすびつけたことによって 17 世紀の新興知識人階層のあいだに広く読者を得た作品である。